
少年日記

神戸の森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年日記

【Nコード】

N8561Z

【作者名】

神戸の森

【あらすじ】

記憶を無くした少年。

その少年が歩んできた過去が綴られた日記。

少年は過去を思い出すかのように日記を読み進めていく。

そんななか少年はある事実気づいてしまう…。

（前書き）

オリジナル作品です。

まだまだ至らない文章運びですがぜひ感想をよろしくお願いします。

ボクの名前は竹内純平。たけうちじゅんぺい というらしい。らしいというのはボクには記憶がないからだ。

名前は親と言う人に教えてもらった。

ほかにも教えてもらったことはある。

ボクは事故にあったということ。

それで頭を打ち記憶がなくなったらしい。まったく覚えてないが、そして数日経ったころだった。

ボクは入院していた病院を後にし、全く覚えていない自宅へと帰ってきた。

親に案内してもらい、ボクは自分の部屋に通された。

その部屋さえもボクには全く憶えがなかったが、どこかなつかしい気持ちになった。

そして自然と足が向かったのは勉強机。ふと手が伸びた先は引き出しだった。

そして開けてみると、その引き出しの中にはノートが一冊入っていた。

ばらばらと見たところ日記のようだった。何か思い出すことがあるかもしれないと思い、ボクは最初から読んでみた。

2005年4月1日

ボクは今日から小学四年。せっかくなので日記を書くことにする。ただ飽きるかもしれないから気が向いたときに書くことにしようと思う。

そこからは普通のことし書かれていなくまったく他人の日記を読んでいるような気分だった。だが気になるところがあった。

2006年3月1日

小学四年最後の席替え。これがボクの運命を変えた。大げさかもしれないけどこれはボクの運命を変えてくれた。隣の席の子が宮内涼子みやうちりょうこという子になった。子のこのことはぜんぜん知らなかった。

(この日だけやけに長いな…)

ボクはいつも忘れ物をしていた。この日もだった。国語の教科書を忘れた。仕方ないから隣の宮内に見せてもらおうと思ったけど宮内はすでに教科書をこちらに見せてくれていた。

ボクは

「ありがとう」

それだけ言った。

彼女は微笑んだだけだった。ボクはこの子が不思議だった。

「なんだろう…この日記は絶対に読まないといけない気がする

…」

独り言だった。ボクはそれから、黙々と日記を読み進めた。

一冊の日記なのに、とても思いがそれには収まらないような気持ちがつづられていた。

だけど読み続けた。ひらすらと。時間を忘れて。

(パタンッ)

音を立ててノートを閉じた。読み始めてどれくらいの時間が経ったのだろう…。わからない。だけどまたボクは日記のことを思い出していた。

ボクは四年生で初めて恋をした。宮内涼子に。隣の席になり、教科書を見せてくれた。

そんな些細なことでボクは少しずつ好きになっていた。ほんの隣の席にいる間。それが幸せだった。

ずっと宮内を目で追いかけた。だけどボクは意気地なしで、弱虫で、告白することができなかった。

それからずっと、ずっと長い間遠くから見守ることしかできなかった。

小学校はそれから同じクラスになることはなく卒業した。そして中学校。同じ学校だった。だけどクラスは一緒じゃなかった。

中学二年のこともう一度、同じクラスになっていた。

五年も経っていた。だけどボクはずっと好きだった。変わらずに…。

だけどそれはボク自身が変わっていなかったから、意気地なしで、弱虫のままだったから…。

ボクはまた告白できなかった。中学三年は違うクラス。何も変わらないまま、卒業式を迎えた。

なにも変わらないはずだった。

なのに、その日、宮内涼子は卒業式に参加しなかった。

宮内涼子は卒業式の日の朝、事故にあい、病院で死んだということを知った。

ボクは心が抜けたように帰った。そんなボクが逃げられる場所は日記。そこしかなかった。日記は涙の跡がたくさんあり、

嘘だ…死んだなんて嘘だ！

ほかにも思いつめているとわかる文章がずらずらと書かれていた。

そして『死』の文字が数え切れないほどの数が書かれていた。そのページの後は白紙だった。

精神的に追い詰められていたのだろう。思いを伝えることができずにそのまま一生、思いを告げれない。そんなことに意気地なしで、弱虫のボクには耐え切れるものではなかったんだろう。

ボクはわかってしまった。真実に…。

ボクは事故にはあっていない。宮内のあとを追い、自殺をしようとしたのだ。と…。

ボクはどうしたらいいのかわからなかったけど今のボクも昔のボクもどちらも生きる目標がない。ボクは自分がしないといけないことに気づいた。それは…

目が覚めた場所。それはどこかはわからない。白い天井。横にいる白衣の男。

その男と話している年配の男女。何も思い出せない。なにがあったのか…。何もわからない。だが目をつぶりまた眠りについた…

—完—

(後書き)

読んでくださりありがとうございます！

よろしければ感想を書いてください！

連載小説はまったく違うジャンルに挑戦しています！

そちらのほうも読んでくださると非常にうれしいです^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8561z/>

少年日記

2011年12月26日23時56分発行